

宮柁二と新美南吉（上）

鈴木 竹志

佐藤通雅の宮柁二論の第一冊目となる『宮柁二 柁二初期及び『群鷄』論』（校書房）は、実に緻密に宮柁二の初期の作品と第一歌集『群鷄』の作品について論を重ねている。特に初期作品については、これまであまり研究対象にのぼらなかったのが、貴重な初期作品研究と言える。

この初期作品研究を読み進めてゆくと、初期作品のうちでも『冬至集』という、柁二が私家版として戦前出した詩歌集について、論を書き進めている中で、最後の「(4) 短歌篇」のところ、こんなことが書かれているのを見つけて、少なからず驚いた。『冬至集』の「短歌I」について述べた後、佐藤は次のように書いているのである。

このように、早くから短歌に比重をかけていたのは、柁二の才質との関わりなしには考えられない。本当は、北原白秋に心を寄せて門下生になったのだから、多くのジャンルを試みるチャンスはあつたはずだ。白秋自身が多ジャンルを駆使した張本人であるし、その弟子筋の異聖歌や新美南吉との交流による刺激もないはずがなかった。この箇所を読んで、私は率直に驚かざるをえなかった。私の郷土の童話作家として有名な新美南吉が、かつて宮柁二と

の交流があつたと書いてあるのである。コスモスの仲間から、宮柁二と新美南吉との交流についてはそれまで聞いたことがなかった。驚きつつ、読み進めていくと、確かに宮柁二と新美南吉との交流を認めざるをえない内容が書かれているのである。まず、異聖歌との交流について、佐藤は次のように書いている。

柁二が白秋宅を訪れるのが一九三三年四月。しかし、白秋の作品にはもともと早くに親和し、門下の異聖歌との交流もはじまっていたらしい。一九三三年一月十五日の日記に「夕方、野村さんのところで夕飯を御馳走になって来る。」とあるのは、その証拠だ。野村さんとは、野村七蔵、異聖歌の本名。七月二十六日の項にも、「夜、中野の野村さんのところにゆき、帰りに新聞屋の加賀美兄のところによる。」とある。異聖歌は、この前年に東京、中野に家を借り、愛知から上京した新美南吉と同居。やがて結婚し、家庭を持つている。そういう新婚家庭で夕飯のご馳走になったり、夜分に訪問したりするのだから、親密度はかなり進んでいたと考えてよい。異が特に面倒をみた新美南吉と、交流の生じるのも自然なことだ。柁

二は一九一二年生まれ、南吉は一九一三年生まれだから、同世代でもある。

この後、佐藤は、異聖歌と新美南吉それぞれについて説明を加えてゆく。まず異聖歌について。

その異聖歌は「赤い鳥」の童話欄をきっかけにして白秋門下生になる。短歌もかなり作り、一時は「多磨」へ新風を送る若手歌人とも目された。

新美南吉については、次のように述べている。

南吉の方は、やはり「赤い鳥」への投稿をきっかけに文学への志を抱き、童話、少年小説、童謡、詩、短歌と多彩な創作を展開する。

さて、佐藤の論をここまで読んできて、宮柁二と新美南吉とが交流していたことは多分間違いないと思うが、それを実証する資料がやはりほしい。そこで、『宮柁二 青春日記』（本阿弥書店）を読んでみた。この書は、先の佐藤の論にも出てくる「日記」を収めた書である。佐藤の論では、野村さん（異聖歌）の世話になっていることは明らかにしたが、新美南吉の名前は出てこなかった。新美南吉の名前が出てくる箇所はないかと読み進めていったところ、何と「新美」という人物との出会いを記した箇所があるではないか。昭和八年二月二十三日の記述を読んでゆくと、次のように記している。マドカで新美さんに会ふ。

たったこれだけの記述であるが、間違いなくこの「新美さん」は新美南吉である。註も付けられていて、「新美南吉。童話作家。大正2年生まれ、昭和18年没。」と簡潔に記して

ある。残念ながらこの一箇所だけである。「野村さん」が出てくる箇所はかなりあるので、ひよっとしたら、野村宅で宮柁二と会っていた可能性は充分あるが、確証はない以上、この一箇所が良しとしたい。

ここまでは宮柁二側の資料について述べてきたが、新美南吉側の資料に二人の交流の確証となる資料があるのではない、新美南吉側の資料を探ってみたところ、確証となる資料に巡り会うことができた。その資料は『校訂 新美南吉全集 別巻1』（大日本図書）に収められた「新美南吉年譜」である。この年譜を見てゆくと、先に宮柁二が新美南吉に会ったことを記している昭和二年二月二十三日のところに、次のような記述がある。

夜、足立真一と質屋、他の友人（姓名不詳）から借用の英語の本三冊で一円借用。喫茶店で宮柁二に会う。新聞配達で月収八円とのこと。小林多喜二の獄死を知る。

この記述から、『宮柁二 青春日記』に記されている「マドカ」が喫茶店であることが分かる。なお、この記述は、日記原本によるものではない。凡例には、次のように記されている。

大石源三ノート（南吉の「文芸日記」（一九三三一月一日～二月三十一日）の原文を転写したもの）

つまり、南吉直筆の日記はこの時期のものは現存しないために、大石源三氏が転写しておいたものを使用しているということがある。

この年譜には、もう一箇所宮柁二が登場する。同年四月二

七日である。次のような記述がある。

原稿を書くために材料持参で、巽聖歌宅へ。聖歌は出版社に不在。野村千春、武居（千春の弟）、妹（千春の妹か）が野芹とよめ菜を摘んでくる。宮柁二もくる。野菜サラダの入ったパンで昼食。千春は日光を受ける若葉の緑に初夏を発見、驚く。

『宮柁二 青春日記』には翌日の二八日の記述はあるが、この四月二七日については、記述はない。巽聖歌と夫人の野村千春は、新美南吉や宮柁二といった文学青年の面倒をよく見ていたことが、この記述からも分かる。多分、巽聖歌邸は一種の文学サロンとなっていたのではなからうか。ただ、南吉の日記にも宮柁二は二回登場しているだけだから、宮柁二は、しだいにこの文学サロンからは遠ざかっていったようだ。その要因の一つとしては、宮柁二は、この四月に北原白秋宅を訪れ、その門下生となるということで、白秋門下の歌人としての道を歩み始めたことによるのではないかと思う。ただ仕事のほうは、南吉に語った新聞配達の仕事は四月二八日には辞め、東学社という出版社に勤めるが、その後谷中の大地堂という額縁屋に住み込むことになる。転々と仕事を変える生活は、昭和十年の八月に白秋の秘書となるまで続く。

さて、それぞれの日記から二人の交流が分かったが、では、日記以外の資料はないのだろうかという疑問が湧いてくる。結論から言えば、新美南吉については、この年譜の元となった日記以外に、宮柁二の名前が出てくる資料はない。しかし、宮柁二のほうには、南吉について書いた文章がある。これは、

宮柁二が戦後、歌人として大成して、長く歌壇の中心にあつたことにもよると思う。この宮柁二の文章の所在についても、佐藤通雅の評論によって知ることができたのである。

佐藤は、「新美南吉記念館 研究紀要」第二十九号に、「再読・新美南吉 7 短詩型文学の世界」と題する評論を書いている。この評論において、佐藤は、南吉が短歌に入門するチャンスが「中学時代をのぞいても二度はあった。」と書き、次のように二度のチャンスについて書いている。

その一度目は、ほかならぬ巽聖歌との出会いのときだ。巽は北原白秋門下生であり、歌誌「多磨」が創刊された後、熱心な会員である。ところが上京後の南吉と交流が深まってからも、歌作への誘いはしていない。南吉の死後になって少なからぬ短歌作品の存在を知ったのである。二度目は、宮柁二との出会いである。宮は、一九一二年（大正元）年八月二三日に新潟県北魚沼郡堀之内に生れる。南吉のほうは、一九一三（大正二）年七月二〇日愛知県知多郡半田町生れだから、年齢差は一年。このふたりが巽聖歌を介して、東京で出会い、一時は親密な交流を持つことになる。

こう書いた後、佐藤は宮柁二が書いた「私の愛する人生詩」という文章を取り上げて、宮柁二と新美南吉の交流を紹介するのである。しかし、この「私の愛する人生詩」という文章は、『宮柁二集』には収められていないし、別巻の「著作年表」にも記されていない。だから、コスモスでは、宮柁二と新美南吉との交流もほんの一部の人にしか知られていな

かったのではないかと推測されるのである。

佐藤は、「私の愛する人生詩」の一部しか紹介していないが、非常に貴重な文章であるので、ここでは全文を紹介する。

雲

まず火屋を研ぎすませ。

古い油を捨て、

精製された美しい油をみたせ。

芯を一字に切れ。

燐光の青さを点じ、

焰の明るい花を咲かせよ。

新美南吉の詩です。「墓碑銘」という彼の詩集にのっています。彼の兄貴分の巽聖歌が編纂したものです。

私が彼と親しかったのは、昭和七年ごろから昭和十年頃までの期間でした。彼は東京外語学校の学生であり、私は上京して下宿でぶらぶらしたり、金がなくなると新聞配達をしたりしていました。ふたりが親しくなったのは、巽聖歌氏を通じてでした。二十歳前後のことで、ふたりは東京中野区上高田あたりの、居酒屋とか喫茶店とかで、詩や歌のことを、よく語り合いました。

私はその頃の彼の言葉を、もう忘れていますが、この詩を読むと、「ああ、彼はこんな気持ちで、創作に向かっていたのか。詩をよむ心の生活を、こんなふうに分身に与えていたのか。」などと、懐かしさのこみあげてくるのを抑えられないのであります。

詩のきおった調子は、彼の若かったためでありましょうが、

その若さは、彼にも私にも共にあったのだ。この詩の心は、彼と暗い灯の下で語り合ったものだったのだ、などと考えるのであります。

しかし、こうして詩に現わされればそうだと思うのですが、こうした輪郭では、気づかないものでした。私たち詩歌をよむもの、詩歌だけでなく、ひとしく生活を持つもの、それはこうした若い精神、緊張、決意をいつになっても持っていたいなどと、改めて感ずるのであります。大自然、大宇宙の中で、毎日毎日が新しい意味に満ちつつ訪れてくる。その毎日毎日と私たちは、長い時間の中ではいつも若い、そう考えるのであります。

この詩の作られたのは、昭和十四年十二月十九日ということですが、私はその年の八月に応召入営し、詩のつくられた十二月には、北支の山の奥ふかくにいました。それよりさき、彼は昭和十一年十一月末に郷里の愛知県に帰省しています。この彼の帰省以後、私は彼と、もう会うことがありませんでした。そして彼は、昭和十八年三月二十二日に三十歳で逝きました。そのとき、私はまだ戦地にいました。

この詩は詩をつくる精神、生活を迎える心をつたったものだと思いますが、最後の行の「花」を、詩と解しても生活と解してもよく、さらに「人生」と解してもいいように思えます。

(P・H・P) 四〇年八月号)

(「私の愛する人生詩」「新美南吉研究」第八号『新美南吉全集 第6巻 詩集』(牧書店) 付録に所収、昭和四十年十一月二十八日発行)